2　名勝を構成する要素

⑴　本質的価値を構成する要素　※本文中の構成要素《数字》は位置図上の番号と対応

①　自然的要素

i　地形・地質

○岩石（リアス式）海岸

・海食崖　【位置図Ｐ 50　立石崎地区１】

音無山の尾根の北端が直接海岸線となっている小岬が立石崎《１》で、ここを境に東が岩石（リアス式）、西が砂浜と、海岸線が著しく変化する。

・海食洞　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

立石崎の急峻な海食崖の弱体に天の岩屋《1》があり、古くから岩窟正面に拝殿が建てられ、信仰の対象となっている。

・離れ岩　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

立石崎の波浪浸食作用によって形成された離れ岩が立石（夫婦岩）《２》で、大きい方が男岩、小さい方が女岩と呼ばれる。

女岩は昔、ノッチの発達で根元がくびれ、多少きのこ状を呈していたが、大正７年（1918）の台風により折れて傾いたため、大修復を行い、坂手島から搬入した岩石を周囲に据えつけ鉄筋コンクリートで固めている。

男岩は昭和 43 年（1968）に波浪浸食により崩れはじめたため、エポキシ樹脂の接着剤を注入している。背面に当たる北側（海側）には割石による補強工事もなされている。

・岩・石　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

立石崎には、立石（夫婦岩）の他にも「名物岩」として、烏帽子岩《３》、獅子岩《４》、屏風岩《５》がある。

中でも、烏帽子岩は近年、猿田彦大神の使いである蛙の容姿に似てきたため、蛙岩（親子蛙）と呼ばれている。

○砂浜海岸　【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

立石崎から西の五十鈴川の河口に至るまで、延長約４ km にわたって河川の堆積作用と潮流により形成された弧状の砂浜が二見浦《１》である。

古代から歌にも詠まれ、伊勢の海を代表する砂浜として知られる。

○丘陵　【位置図Ｐ 73　音無山地区】

江川（五十鈴川派川）の北部で北東―南西方向に延びる山系で、標高 119.8 m の音無山《１》を最高所とする。尾根の北端は立石崎へと連なる。

○三波川結晶片岩（丘陵）【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

山地は中央構造線推定ラインの南側に位置し、全て西南日本外帯の三波川変成帯に属しており、緑色片岩《６》、角閃岩《７》、石英片岩《８》等が見られる。

立石（夫婦岩）の男岩は緑色片岩、女岩は石英片岩より成る。

○沖積層（平地）【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

平地を形成する沖積層は、砂・礫層《２》を主とし、縄文海進（およそ 7000 ～

8000 年前）以降の海浜堆積物《３》で覆われている。

ⅱ　海洋

○岩礁　【位置図Ｐ 50　立石崎地区１】

立石崎の北東沖、約 660 ｍの海底に興玉神石《2》がある。

二見興玉神社の御祭神猿田彦大神の依代といわれる。

東西 216 ｍ、南北 108 ｍの平たい大岩で、上に３つの岩柱が立ち、かつては引潮時に見ることができたが、安政元年（1854）の安政東海・東南海・南海地震により海中に没し、今ではその姿を目にすることはできない。

ⅲ　植生

○二見興玉神社　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

神社内の参道山側の斜面にはトベラ《９》が多い。

店舗棟前の広場に「契りの松」《10》がある。江戸末期に伊勢参詣の男女が夫婦の約束をしたことから、この名が付いた。昭和 28 年（1953）の台風で流失したが、平成３年（1991）に再現された。

○二見浦公園　【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

海岸沿いにクロマツの並木《４》があり、優れた景観を構成しているが、伊勢湾台風後の海岸護岸の築造により、砂浜と分断された。

○御塩殿神社（社叢）【位置図Ｐ 70　御塩殿地区】

二見浦の打越浜に接し、御塩殿神社の広大な森がある。伊勢湾台風の被害も比較的少なくすんだ模様で、大木、老木の密林が昔の面影を止めている。社叢は以下の５つの場所にそれぞれ特徴が見られる。

・南側正面《１》

クロマツ、クスノキ、オガタマノキ、ミミズバイ、タブノキ、タイミンタチバナ、ウバメガシ、カクレミノ、エノキ、ハゼノキが見られ、生垣はサンゴジュである。

・参道《２》

クスノキの大木、スギ、カシ類、トベラ、カクレミノ、モチノキ、ヤブツバキ、アオキ、ヤツデ、シロダモが見られ、ミミズバイは林をつくっている。

・社殿周辺《３》

クロマツ、クスノキの大木、カクレミノ、ヤブツバキ、トベラ、カシ類、シイ類、タイミンタチバナ、ミミズバイ、ヤブニッケイ、イヌマキ、ネムノキ、アオキ、エノキ、クロガネモチ等があり、東南の林中にカゴノキの若木が二本ある。

・西側《４》

タイミンタチバナの林が続き、前記の樹種が混合して密林をつくり、下草はほとんどない。

・北側背面（打越浜）《５》

海岸沿いにクロマツの松林があり、御塩焼所前には大木が聳え立っている。

○音無山　【位置図Ｐ 73　音無山地区】

二見浦の背後に聳える音無山には常緑広葉樹が多く、暖地性植物も分布している。

・広葉樹林《２》

常緑広葉樹として、アオキ、アセビ、クスノキ、クロガネモチ、サカキ、サンゴジュ、シラカシ、シロダモ、ソヨゴ、タイミンタチバナ、テイカカズラ、トベラ、ネズミモチ、ビワ、ヒラドツツジ、モチノキ、ヤマモモ等が見られ、落葉樹もアカメガシワ、イロハモミジ、ウメモドキ、カラスザンショウ、キブシ、クリ類、クロモジ、コナラ、ニシキギ、ムラサキシキブ、モチツツジ、ヤマウルシ、ヤマガキ等が見られる。

・植物《３》

クマザサ、サツキ、コウザキシダ、オオバノハチジョウシダ、コシダ、フユヅタ、ヤマユリ等が見られる。

・音無山公園《４》

音無山の北側斜面には、平成４年（1992）から整備された遊歩道沿いに多くのサクラ類が植樹され、市内を代表する桜の名所のひとつになっている。

○賓日館　【位置図Ｐ 81　賓日館地区】

明治 20 年（1887）に貴賓の宿泊施設として建設された賓日館の敷地にも、多くの樹木が植樹されている。

・庭園

ウメ《１》、イロハモミジ《２》、カシワ《３》、クロマツ《４》、ソメイヨシノ《５》、サツキ《６》、サルスベリ《７》、ヤマツツジ《８》、ジングウツツジ《９》、ヤブツバキ《10》、ヒノキ《11》、イヌマキ《12》、モッコク《13》が見られる。

・生垣

クロマツ《４》、ソメイヨシノ《５》、ヤマツツジ《８》、イヌマキ《12》、モッコク《13》、ウバメガシ《14》、サカキ《15》、イヌツゲ《16》が見られる。

・玄関先

クロマツ《４》、ヤマツツジ《８》、ウバメガシ《14》、シバ《17》、ヒイラギ《18》が見られる。

iv　動物

○昆虫類　【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

海浜の砂浜や漂着物の下に生息するクロズハマベゴミムシダマシ《５》（三重県レッドデータブック絶滅危惧ＩＢ類）、海浜の砂浜や松林に生息するオオヒョウタンゴミムシ《６》（同絶滅危惧Ⅱ類）が確認されているが、生息環境の悪化により近年の減少が著しい。

○貝類　【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

沿岸に生息する巻貝のミヤコドリ《７》や二枚貝のフジノハナガイ《８》（ともに三重県レッドデータブック準絶滅危惧種）が確認されているが、生息環境の悪

化により減少している。

② 歴史的要素

i 二見興玉神社

○立石（夫婦岩）【位置図Ｐ 51 立石崎地区２】

・景観

二見浦の中心的な価値を構成する要素で、立石崎の磯合に大小の岩（男岩と女岩）が離れて突出している。興玉神石及び日の出の遥拝地としての結界の石であり、手前の海は「垢離場」として参拝客が心身の穢れをとる場であった。

太陽が男岩と女岩の間から昇る夏至頃の日の出《11》は、日本を代表する風景として世界的にも著名である。同様に、満月が男岩と女岩の間から昇る冬至頃の月の出《12》も趣深い。

また、条件がよければ、立石の間に富士《13》を望むことも出来る。

・行事

いつ頃からかは不明であるが、立石（夫婦岩）は興玉神石を拝する鳥居の役目を果たしているため、大注連縄が張られている。この男岩と女岩を結ぶ大注連縄を張り替える夫婦岩大注連縄張神事《14》が、５月５日、９月５日、12 月中旬の土曜日若しくは日曜日に行われる。重さ 40kg、長さ 35 ｍの大注連縄５本が手渡しで送られ、氏子たちによっておごそかに張り渡される。

○興玉神石 【位置図Ｐ 50 立石崎地区１】

・行事

二見浦で沐浴できない者に授けた無垢塩草を採取する藻刈神事《３》が、５月 21 日に興玉神石の海上で行われる。榊と幟を立てた船に神職が乗り、手鎌で藻草を刈り取って奉納する。

○二見興玉神社 【位置図Ｐ 51 立石崎地区２】

・建築物

二見興玉神社が立石崎に創設されたのは、明治 30 年（1897）６月 18 日と古くはなく、江村・大江寺の鎮守神、興玉社を神遷したもので、はじめは茶屋が氏神とした三宮神社の境内社であったが、明治 43 年（1910）３月末日をもって両社を合祀、無格社・二見興玉神社と改称した。

当初、本殿《15》と拝殿《16》は木造で山側にあった（海側は参道）が、立石（夫婦岩）の女岩が損壊した大正７年（1918）の台風で、それぞれ半壊した。戦後も昭和 30 年（1955）の台風で半壊したが、同年 11 月に新築され、本殿、拝殿とも海側に移転し、拝殿はこのとき鉄筋コンクリート造となった。

その後、本殿は昭和 50 年（1975）、平成８年（1996）に新築されて現在に至り、拝殿は昭和 60 年（1985）頃、いったん朱塗りになったが、平成８年（1996）に新築されて現在に至っている。建築様式は、本殿が神明造で、拝殿は縦拝殿である。

儀式殿《17》は、昭和 40 年（1965）に社務所の東側に建築された。鉄筋コン

クリート造２階建で昭和 60 年（1985）頃、いったん朱塗りになったが、平成元年（1989）の改築、平成７年（1995）の増築（拝殿横、鉄筋コンクリート造２階建）を経て現在に至っている。

手水舎《18》は、当初から木造で、平成７年（1995）に新築されて現在に至っている。

・工作物

立石崎は、二見興玉神社が創設される以前から興玉神石及び日の出の遥拝所《19》であり、明治中期までは立石（夫婦岩）正面に賽銭を受ける大三方（方形のたらい形の机）、小注連縄、蛙の置物があり、傍の板葺小屋で神符や風景図を頒布していた。現在は「日の神・皇居遥拝所」として、鳥居、賽銭箱、輪注連縄、蛙の置物が設置されている。

二見興玉神社の鳥居《20》は、当初木造で拝殿前にあった。昭和 30 年（1955）に拝殿とともに鉄筋コンクリート造で新築され、後に朱塗りとなるが、平成７年（1995）に撤去された。現在、表参道入口に建つ石造の鳥居は大正 15 年（1926）築造のものである。それ以前は、表参道中程にある鳥居が一の鳥居であった。

また、裏参道には木造の鳥居があり、こちらは朱塗りのまま現在に至っている。

狛犬《21》は表参道入口に、昭和５年（1930）築造のものがある。

玉垣《22》は本殿、「日の神・皇居遥拝所」の周囲に見られる。

境内には、祭神・猿田彦大神の使いとされる蛙の置物《23》があちこちにある。御神徳を受けた人々が献納した石像で、大正９年（1920）頃にはすでに見られ、その後数が増えて現在に至っている。

・行事

立石崎は、古くから神宮参詣者が沐浴潔斎をする「垢離場」であったが、現在でも太陽が立石（夫婦岩）の間から昇る夏至の日には、夏至祭《24》が行われている。男性は褌姿、女性は白装束で海中に身を浸し、昇る太陽を伏し拝む行事である。

７月 15 日には二見興玉神社の例大祭《25》が行われる。例大祭は猿田彦大神・宇迦乃御魂大神をお祀りし、興玉社が神遷された明治 30 年（1897）以来続けられている。

例大祭宵宮の 14 日には、立石（夫婦岩）に張る大注連縄を奉納する二見大祭しめなわ曳き《26》が行われる。お木曳車同様の奉曳車にしめなわを載せ、木遣唄でＪＲ二見浦駅から表参道入口まで奉曳が行われる。昭和 60 年（1985）以来の伝統行事で、二見の夏に欠かせない風物詩となっている。

また、神宮の式年遷宮に伴い、お木曳、お白石持ち行事が行われる年には、神領民は行事に先立ち、奉曳（奉献）団ごとに浜参宮《27》を行う。古来より神宮の行事に参加する場合は禊で心身を清める慣わしであったが、現代では禊の代わりに興玉神石より採取される無垢塩草でお祓いを受けることが一般化し

ている。

○龍宮社　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

・建築物

寛政４年（1792）５月 15 日、江村を大津波が襲い、甚大な被害が発生したため、江川（五十鈴川派川）河口に竜神を勧進したのがはじまりで、昭和 13 年（1938）二見興玉神社境内地に神遷された。

昭和 46 年（1971）御造営奉祝祭が執り行われ、鉄筋コンクリート造、朱塗りの本殿《28》、拝殿《29》、手水舎《30》が新築されて現在に至っている。

建築様式は、本殿が神明造、拝殿は横拝殿である。

・工作物

拝殿前に鳥居《31》と狛犬《32》があり、鳥居は平成 19 年（2007）に石造で新築され、現在に至っている。

玉垣《33》は本殿、拝殿の周囲に見られる。

・行事

旧暦５月 15 日、龍宮社前の砂浜で、寛政の大津波による犠牲者を偲び、郷中施《34》が行われる。木舟にきゅうり、みる、まつな等の供え物を乗せ、巫女の手により海に流すが、これには「（津波を）急に、見るな、待つな」の思いが込められている。

○天の岩屋　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

・建築物

二見興玉神社の境内にある天の岩屋は、稲荷神の宇迦御魂大神を祀った三宮神社の遺跡とされるが、元は漁人に祀られる古い神のシャグジ（石神）で、洞内深く燈火が点されていた。シャグジを三狐神とも表記したことによる変遷と見られる。

拝殿《35》は木造で、立石（夫婦岩）の女岩が損壊した大正７年（1918）の台風で半壊したが、女岩の修復に合わせ改修された。昭和 50 年（1975）には白木の木造で新築されたが、後に朱塗りとなり現在に至っている。建築様式は縦拝殿である。

・工作物

拝殿前の鳥居《36》も木造で、拝殿と同じ経緯を辿ったが、平成 13 年（2001）にプラスチック造、朱塗りで新築され、現在に至っている。

玉垣《37》は拝殿の周囲に見られる。

ii　二見浦海水浴場　【位置図Ｐ 64　二見浦地区４】

・行事

明治 15 年（1882）内務省衛生局長、長与専斎の勧めにより、日本で最初の海水浴場が立石崎に開設された。当時は健康促進に効能の高い冷浴と温浴から成る海水浴で、利用者の増加に伴い、明治 17 年（1884）に賓日館前の砂浜に場所を移して本格的な海水浴場が開設された。

明治 24 年（1891）には皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）が海水浴に訪れ、後に日露戦争の傷病兵の療養先ともなり、数多くの人々により保養地として利用されてきた。

戦後は旅館街西側の海岸に施設が整備され、現在に至っている。

７月上旬には浜開き《１》があり、二見興玉神社の神職による祝詞の奏上、お祓いが執り行われる。

iii　御塩殿神社　【位置図Ｐ 70　御塩殿地区】

・建築物

二見浦の打越浜に面して鎮座する内宮の所管社で、神宮に供える御塩を作る。その存在は古く、延暦 23 年（804）の『皇大神宮儀式帳』に記載されている。寛政９年（1797）刊行の『伊勢参宮名所図会』では、萱葺の本殿、古殿、本殿東西の宝殿、御塩殿、御塩汲入所、御塩焼所、さらに八王子社が確認できる（図Ⅱ－１）。

図Ⅱ－１　御塩殿（『伊勢参宮名所図会』寛政９年（1797）刊行）

現在も、境内地の中心に御塩殿神社《６》と御塩殿《７》があるが、古殿地や小殿は無く、御塩殿の右奥に荒塩を保管する御塩御倉《８》がある。鹹水を移す御塩汲入所《９》、荒塩を奉製する御塩焼所《10》は、図Ⅱ－１のとおり背後の海岸近くに存在するが、八王子社は、今はない。

建築物はすべて木造で、御塩殿神社の建築様式は神明造、御塩汲入所と御塩焼所は天地根元造と呼ばれる独特の様式である。

・工作物

鳥居《11》は、図Ⅱ－１では参道に二つ、本殿前に一つ、御塩焼所前に一つ見られるが、現在、参道の二の鳥居は存在しない。また、本殿前の鳥居は、現在は御塩殿前にある。鳥居もすべて木造である。

玉垣《12》は、図Ⅱ－１では本殿、古殿、御塩殿を一括して取り囲むようにしてあるが、現在は御塩殿神社と御塩殿を個別に囲むかたちとなっている。玉垣も木造である。

・行事

毎年７月、土用の日から五十鈴川右岸にある御塩浜で、汲みあげた海水を天日で濃縮（採鹹）した塩水は御塩汲入所へ移される。８月上旬、一昼夜に渡り隣接する御塩焼所で火にかけ荒塩を精製し（荒塩奉製《13》）、10 月と翌年３月上旬のそれぞれ５日間ずつ、御塩殿でこの荒塩を三角錐の容器に入れ焼き固め、堅塩を作る（御塩焼固《14》）。なお、10 月５日の御塩焼固の初日には、塩業一般の繁栄を祈る御塩殿祭《15》が行われる。

1300 年来続く神宮のみの宗教的行事として実施されている式年遷宮は、過去から引き継がれてきた技術、形式、建築様式等をそのまま将来へ引き継ぐため、建築様式等の変更はせずに修理、造替を行うものである。その一環として、摂社・末社・所管社は 20 年目に大修理、次の 20 年目で新しく造替する。御塩殿神社は内宮所管社として、御塩殿神社、御塩殿、御塩焼所、御塩汲入所の各社殿がその対象となっており、式年遷宮の宗教的行為として、各社殿及びこれらに付随する御塩御倉、鳥居、玉垣等が 20 年毎に造替または修繕が実施される。

iv　賓日館　【位置図Ｐ 81　賓日館地区】

・建築物

神宮の崇敬団体として明治 19 年（1966）に設立された神苑会が、津藩の砲台跡地に建設した神宮参拝の賓客休憩・宿泊施設。明治 20 年（1887）２月 19 日に開館した。

敷地はほぼ正方形で二見浦に望む北側を正面とし、敷地の北西側を前庭、北東側を庭園に当てている。

創建当時の賓日館は、玄関棟《19》、東棟《20》、西棟《21》、渡廊下棟《22》で中庭を取り囲み、東棟から矩折れてさらにその東側に客室等を配する構成になっていた。玄関棟は入母屋破風の銅板葺き、東棟は２階建でそれ以外は平屋の桟瓦葺きであった。

明治 44 年（1911）に旅館二見館を営む若松家に売却後、別館として利用され、明治末期から大正初年頃に行われた大増改築により、玄関棟、西棟が２階建になったと見られる。

昭和５年（1930）頃から２回目の大増改築が行われ、昭和 10 年（1935）には東奥の客室棟が大広間棟《23》に建て替えられた。また、玄関棟は唐破風に改められ、ほぼ現在の状態の賓日館が完成した。

このように賓日館は、明治期から昭和戦前期にかけての和風建築の技術や意匠の進展をよく示しており、近代和風建築の好例として、裏手にある土蔵《24》も含め、平成16年（2004）３月17日に三重県の有形文化財（建造物）に指定された。

なお、多くの要人を迎えた宿泊施設としての役割は平成11年（1999）に終え、平成15年（2003）には二見町に寄贈され、写真・絵葉書・調度品や郷土の画家・中村左洲の作品を展示する資料館としてオープンした。

・工作物

正面玄関の両脇には、石灯篭（右：春日型、左：雪見型）《25》が据えられており、いずれも立派なつくりで玄関の雰囲気作りに貢献している。

また、石灯篭（春日型）《25》は道路沿いにも１基据えられている。

・庭園

砂利道《26》を歩いて周回できる回遊式の庭園で、バランスよく砂利道の外側が内側を生かす造りになっている。作庭者は詳らかでないが、随所に庭師の細かい配慮が残されている。また、南側の裏庭にも創意工夫が見て取れる。

庭園入口には門《27》があり、左右に塀《28》が連なる。東棟の「ことぶきの間」の前には蹲踞《29》と沓脱石《30》があり、庭園からの出入りがあったことを窺わせる。

「ことぶきの間」東側の枯池の中には、明治24年（1891）８月の大正天皇腰掛け石《31》があるが、本来は池に浮かぶ船を模して設置されたものと考えられる。庭石にはすべて山石が使われているが、枯池中央に架かる石橋《32》の挟み石だけが海石であるため、この橋は後付けされたものと分かる。

石橋東側の枯池《33》には上り亀、下り亀、亀島、鶴島が配されている。この枯池の東側には、大きな鞍馬石（花崗片麻岩）を井桁に組んだ珍しい井筒《34》もある。井筒の東側から枯池は排水路《35》となり、水の流れをイメージさせる意匠となっている。

大広間棟１階「うめの間」の前には、沓脱石《30》と飛石《36》がある。外側の飛石は、古い寺院などの基礎石を転用した伽藍石《37》であるが、由来は明らかでない。「うめの間」東隣りの「まつの間」の前にも蹲踞《29》があり、鉄鉢型の手水鉢が据えられている。

石灯篭《25》は春日型、利休型、山型があり、山灯篭は自然石を寄せ合わせて造った寄せ灯篭であるが、昭和19年（1944）の東南海地震にも崩れることはなかった。この灯篭は庭園の中心部に位置しており、庭園の守護石であると推測される。また、外灯《38》以外にも、庭園奥に立つ石塔《39》は、照明機能を有する五層塔である。

庭園北東側は広い芝生の草地となっているが、ここは内庭の借景である外庭の部分に当たる。文久３年（1863）、津藩主藤堂高猷により築造された砲台《40》の一つがここにあったと見られる。

この庭園には、他に自然石を利用した小橋、石畳《41》、ベンチ《42》がある。

また、中庭には珍しい石灯篭（蓮華寺型）《25》があり、裏庭にも、石灯篭（雪見型、山型）《25》、蹲踞《29》が配されている。

③　社会的要素

ⅰ　二見浦公園　【位置図Ｐ 62　二見浦地区２】

・施設

二見興玉神社の入口付近から二見浦海水浴場にかけての海浜（砂浜・堤防・松並木を含む）は都市計画公園であるが、神社参道が直接公園に面する辺りは駐車場《２》として利用されてきた。

平成 18・19 年（2006・2007）にこの部分のリニューアル整備を行い、脱色アスファルトの車両用通路、緑化ブロックの駐車スペース、擬石ブロックのライン区分等により、自然景観に近い、緑地の多い駐車エリアに改変している。

また、残地は緑地帯としてクロマツを植樹し、既存のクロマツの並木周辺には築山を設ける等近隣景観に配慮し、緑地の増加を行っている。

ⅱ　音無山公園　【位置図Ｐ 73　音無山地区】

・施設

音無山の稜線から北側の山腹一帯は、音無山公園として平成４年（1992）～７年（1995）にかけて全長 2650 ｍの遊歩道《５》が整備され、春の花見、夏のハイキング、秋の紅葉、冬のウォーキング等、四季を通しての利用が可能である。

また、神前海岸を見下ろす山頂部は、初日の出や富士山を望むことができる「日の出の見える展望台《６》」として整備されている。

⑵　本質的価値を構成する要素と密接に関わる要素

※本文中の構成要素〈数字〉は位置図上の番号と対応

①　自然的要素に関わるもの

ⅰ　自然的要素維持のための工作物　【位置図Ｐ 61　二見浦地区１】

○海浜

河川から流入する砂の減少や潮位の上昇により砂浜が後退し、昭和 35 年（1960）以来、砂浜の復旧を図るため養浜突堤〈１〉が敷設されている。打越浜（御塩浜）にはＴ字型の突堤が組み合わされており、立石崎から二見浦海水浴場にかけての古い突堤は、三重県の海岸浸食対策事業で自然石を組み合わせた新しい突堤に順次改修される予定である。

また、立石崎の岩石海岸と二見浦の砂浜海岸は、消波ブロック〈２〉によって区切られている。

ⅱ　危険防止のための工作物　【位置図Ｐ 73　音無山地区】

○音無山

音無山の稜線から北側の山腹一帯は土砂流出・土砂崩壊防備保安林（一部砂防指定区域）で、山麓一帯も急傾斜崩壊危険箇所と土石流危険地区である。これら

の危険を防止するため、各所に擁壁〈１〉、石積み〈２〉、砂防堰堤〈３〉、水路〈４〉が設置されている。

② 歴史的要素に関わるもの

ⅰ 二見興玉神社 【位置図Ｐ 51 立石崎地区２】

・建築物

拝殿前にある社務所〈１〉は当初木造であったが、立石（夫婦岩）の女岩が損壊した大正７年（1918）の台風で半壊し、その後改修されたものの、戦後の昭和 30 年（1955）の台風で再び半壊した。昭和 36 年（1961）12 月に鉄筋コンクリート造２階建で新築され、平成元年(1989)に改装されて現在に至っている。

なお、木造の旧社務所は昭和 38 年（1963）、栄野神社の社務所として移築された。

授与所〈２〉は、二見興玉神社、天の岩屋、龍宮社それぞれにあり、二見興玉神社の授与所は儀式殿の１階に設えられている。龍宮社の授与所は昭和 38 年（1963）に木造の注連殿を移築したもので、天の岩屋の授与所は拝殿の色彩に合わせて一部朱塗りとなっている。

・工作物

石碑〈３〉は「日の神・皇居遥拝所」、「龍宮社」、「天の岩屋」と刻まれたものがそれぞれの場所に立ち、表参道入口付近に「二見興玉神社」（昭和７年（1932）建立）、手水舎付近に「海王大和国」、龍宮社玉垣前に「妙奉　八大龍王大神」（平成 19 年（2007）建立）の碑が立っている。

百度石〈４〉は龍宮社前に２つ、平成 19 年（2007）に建立されている。

常夜灯〈５〉は昭和５年（1930）に献燈されたものが、表参道に１基ある。

石灯篭〈６〉は表参道一の鳥居前に１基（平成３年（1991）献燈）、鳥居内側に２基ずつ３組（鳥居側から平成 11 年（1999）、大正 15 年（1926）、昭和 13 年（1938）献燈）、天の岩屋に１基、天の岩屋前の参道に２基、裏参道に２基ある。

灯篭〈７〉は現在の二の鳥居脇、表参道、拝殿前、龍宮社前にそれぞれ２基ずつある。

絵馬掛所〈８〉は手水舎横、拝殿と儀式殿の間、龍宮社（２ヶ所）にある。

奉献酒樽台〈９〉は表参道、二見興玉神社授与所の横、龍宮社前にある。

初穂料芳名板〈10〉は富士見橋前にある。

案内板〈11〉は龍宮社横に「夫婦岩から表参道へ」示したものがある。

解説板〈12〉は表参道入口付近に「二見興玉神社由緒」、「二見浦と浜参宮」、「夫婦岩」、手水舎に「二見蛙」、儀式殿前に「駕籠たて松の潮湯跡」、店舗棟前広場に「夫婦岩」と「契りの松」、龍宮社横に「二見浦と浜参宮」、龍宮社前に「龍宮社」のものがある。

看板〈13〉は裏参道の鳥居脇と擁壁上の高台（旧二見トンネル道脇）に「二見興玉神社」「八大龍王大神」と記したものがそれぞれある。

歌標〈14〉は「鎮魂のうた」を記したものが本殿付近の参道脇にある。

・記念物

表参道入口付近にさざれ石〈15〉がある。岐阜県揖斐郡春日村（現揖斐川町）産の石灰質角礫岩で、解説板とともに平成15年（2003）に設置された。

ii　二見浦公園　【位置図Ｐ62　二見浦地区２】

・工作物

常夜灯〈１〉は、献燈されたものが二見興玉神社参道に面して建ち並んでいる。

石灯篭〈２〉は、雪見型灯篭が駐車場の築山に配されている。

蛙の置物〈３〉は、親子蛙が一つ駐車場の築山に配されている。

iii　御塩殿神社　【位置図Ｐ70　御塩殿地区】

・建築物

神宮では斎館と呼ばれる社務所〈１〉が御塩殿の東側にあり、裏側はトイレとなっている。

・工作物

石柱〈２〉は「御塩殿神社〃域」と刻まれたものが神社入口に立っている。

定札〈３〉は神域内での禁止事項を記した木札が神社入口に立っている。

手水鉢〈４〉は享保３年（1718）に寄進され「御塩殿」と刻まれたものが一の鳥居の内側にある。寛政９年（1797）刊行の『伊勢参宮名所図会』では参道左手の池に手水舎が見られるが、今は池のみが残っている。

案内板〈５〉は御塩汲入所と御塩焼所を指し示した木製のものが斎館（社務所）前に立っている。

門、生垣〈６〉は御塩汲入所と御塩焼所を取り囲んで設置されている。

iv　音無山　【位置図Ｐ73　音無山地区】

・工作物

神前海岸を見下ろす山頂部に音成神社〈５〉がある。山名が音無山のため、神社だけは「音成」と命名された。昭和初期の音無山の開発に伴い祀られて、平成15年（2003）に現在のかたちとなった。神社は祠、石碑、灯篭、鳥居、狛犬、玉垣、ベンチで構成される。

朱色の鳥居〈６〉も音成神社に隣接して立っている。

・遺構

東大寺大仏再建祈願のため重源が総勢７百余人と来訪したという天覚寺跡が標高119.8ｍの最高所付近に推定されているが、二見町江字江山の旧塵埃焼却場裏の「寺屋敷跡」、二見町三津字南浦に推定する説もある。

また、最高所付近は土塁を一部残すとして伊勢三郎義盛の音無山城址〈７〉（三郎屋敷跡）と推定されているが、こちらも二見町三津の東山常泉寺跡と推定する説がある。

近代の遺構としては、昭和７年（1932）に敷設され、太平洋戦争により同17年（1942）に供出されたロープウェイ跡地〈８〉が稜線から山麓にかけて、所々遺っている。

v　賓日館　【位置図Ｐ 81　賓日館地区】

・工作物

二見浦に面して正門〈１〉がある。

正門の両側に柵〈２〉、石積み〈３〉が続く。

正門から玄関にかけて石畳〈４〉が敷かれている。

正門脇に開館時間、休館日、入館料を記した木製の案内板〈５〉がある。

正門東側の柵の中に賓日館の概略を記した木製の解説板〈６〉がある。

・小公園

敷地北西側の前庭は街なみ環境整備事業で小公園として整備され、ベンチ〈７〉、井戸〈８〉、塀〈９〉がある。

・行事

毎年２月から３月にかけて、おひなさまめぐり in 二見〈10〉が催される。展示されるひな人形の中には、大正初期のもの、遷宮の御残材で作られたもの等貴重なものも見られる。

vi　石碑

○文化財

三重県指定名勝二見浦の石碑〈４〉【位置図Ｐ 62・63　二見浦地区２・３】

昭和 11 年（1936）に指定された「名勝　二見浦」の石碑が、二見浦公園内の海洋楼、冨士見館前の２ヶ所に建てられている。

二見浦浴場石表〈11〉【位置図Ｐ 81　賓日館地区】

明治 17 年（1884）海水浴場が立石崎から賓日館前に移転したことに伴い、翌 18 年（1885）に建立された「設浴潮場」の石表で、衛生局長長与専斎の撰兼書による。賓日館正門西側の柵の中に解説板とともにあり、平成７年（1995）二見町の文化財として指定（現在伊勢市指定文化財）された。

○記念碑

二見浦清記念碑〈５〉【位置図Ｐ 62　二見浦地区２】

明治 26 年（1893）建立。二見浦公園内の賓日館前にある。英照皇太后（明治天皇嫡母）、皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）の賓日館への行啓、宿泊を記念した碑で、題字は時の三重県知事、成川尚義の筆による。解説板が並立する。

万代不易之碑〈６〉【位置図Ｐ 62　二見浦地区２】

昭和 15 年（1940）建立。二見浦公園内の駐車場築山にある。大正７年（1918）の台風で損壊した立石（夫婦岩）の女岩が同 10 年（1921）に修復されたことを記念した碑で、題字は清浦奎吾伯爵の筆による。解説板が並立する。

日本の渚百選認定記念碑〈７〉【位置図Ｐ 63　二見浦地区３】

平成８年（1996）選定。二見浦公園内の浜千代館前にある。日本の渚百選は大日本水産会等で作る選定委員会が発表した百の渚で、三重県内では熊野市の七里御浜とともに二見浦海岸が選ばれた。

東海の観光と史跡認定地〈16〉【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

中部読売新聞社選定の「東海の観光と史跡認定地」の碑が二見興玉神社の店舗棟前広場に立っている。

○歌碑

本居宣長、中村九一　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

本居宣長の歌碑〈17〉は二見興玉神社の店舗棟前広場にある「契りの松」の根元にある。

『変らじな　波は越ゆとも　二見潟　妹背の岩の　かたき契りは』

二見浦の絵に対する画賛の一つで、「妹背の岩」は立石（夫婦岩）を指している。

中村九一の歌碑〈18〉は昭和 17 年（1942）の建立で、二見興玉神社入口前にある。

『いつみても　かはらぬ伊勢の　二見岩　夫婦はなかよく　くらせといふらん』

いつ訪れて来ても変わらない二見浦の立石（夫婦岩）の均整のとれた美しさに夫婦和合の励ましを受けたという献歌である。

西行、本居宣長、清水みのる　【位置図Ｐ 62・63　二見浦地区２・３】

西行の歌碑〈８〉は昭和 62 年（1987）の建立で、二見浦公園内の朝日館前にある。

『浪越すと　二見の松の　見えつるは　梢にかかる　霞なりけり』

二見浦海岸の春の情景を歌っている。解説碑が並立する。

本居宣長の歌碑〈９〉も昭和 62 年（1987）の建立で、二見浦公園内の賓日館前にある。

歌は「契りの松」前にある歌碑と同じであるが、こちらは解説碑が並立する。

清水みのるの歌碑〈10〉は二見浦公園内のいろは館前にある。

『かえる　かえる　二見の蛙　なぁにが　かえる　なんでも　かえる　ふしぎと　かえる　かえるかえる』

経歴碑が並立する。

○句碑

阿波野青畝、小路紫峡、山口誓子　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

阿波野青畝の句碑〈19〉は龍宮社脇にある。

『大初日　二見の巌を　抱擁す』

初日の出をバックにした立石（夫婦岩）の荘厳さを太陽に抱擁された岩として詠んでいる。解説碑が並立する。

小路紫峡の句碑〈20〉も龍宮社のそばにある。

『夏至祭の　しののめ明り　夫婦岩』

立石（夫婦岩）の間から日の出が見られる夏至の暁明を詠んだものである。

山口誓子の句碑〈21〉は昭和 61 年（1986）の建立で、二見興玉神社入口にある。

『初冨士の　鳥居ともなる　夫婦岩』

冷えて澄んだ大気の中、かなたに富士山が現れ、眼前の立石（夫婦岩）がまるで富士山の鳥居のようだと詠んだものである。解説碑が並立する。

松島十湖、松尾芭蕉、橋本鶏二　【位置図Ｐ 62・63　二見浦地区２・３】

松島十湖の句碑〈11〉は明治 32 年（1899）の建立で、二見浦公園内の賓日館前にある。

『月と日の　間の二見の　朝ぼらけ』

まだ月が白く残っている空に真っ赤な太陽が昇って来る二見の朝明けを詠んでいる。

松尾芭蕉の句碑〈12〉は昭和 61 年（1986）の建立で、二見浦公園内の賓日館前にある。

『うたがふな　潮の花も　浦の春』

立石（夫婦岩）を描いた絵に対する画賛の句で、二見浦の新春を祝ったものである。

橋本鶏二の句碑〈13〉は二見浦公園内のホテルリゾートイン二見駐車場前にある。『藻刈舟　礁の波の　上を棹す』

藻刈舟が波の寄せる礁の上で揺れている写生派らしい二見の光景を詠んでいる。藻刈神事の解説碑が並立する。

○その他

二見興玉神社外苑碑〈14〉　【位置図Ｐ 63　二見浦地区３】

「二見興玉神社外苑」を示す石碑が、二見浦公園内の日章館前、ホテルリゾートイン二見駐車場前、いろは館前、冨士見館前の４ヶ所に建てられている。

③　社会的要素に関わるもの

ⅰ　二見興玉神社　【位置図Ｐ 51　立石崎地区２】

○建築物

トイレ〈22〉は現在の手水舎付近にあった接待所に併設されていたが、昭和 30 年（1955）の台風で全壊した。昭和 63 年（1988）12 月、一の鳥居と二の鳥居の間に鉄筋コンクリート造平屋建てで新築され、平成 17 年（2005）に改修されて現在に至っている。

店舗棟〈23〉（裏参道接待所）は昭和 30 年（1955）の台風で全壊したが、その後新築され、平成５年（1993）10 月には鉄筋コンクリート造平屋建てで再度新築され、飲食店や物販店のテナントが入店し、現在に至っている。

小屋〈24〉が二の鳥居付近にある。

○工作物

・道路構造物

舗装〈25〉は市道茶屋１号線の裏参道に施している。昭和 30 年（1955）の台風で被災した後、茶屋１号線となり、参道整備として舗装を行った。平成 20 年（2008）３月、脱色アスファルトで舗装し直し、現在に至っている。

富士見橋〈26〉は当初木造で、立石（夫婦岩）の女岩が損壊した大正７年（1918）の台風で半壊し、再び木造で改修されたが、後に欄干を残しコンクリート造に改められた。しかし、昭和30年（1955）の台風で全壊したため、鉄筋コンクリート造で新築され、その後朱塗りとなったが、平成７年（1995）に再度新築され、現在に至っている。

禊橋〈27〉も欄干が木造であったが、昭和30年（1955）の台風で流失し、その後はしばらく木造の仮橋であったが、鉄筋コンクリート造で新築され、その後朱塗りとなり、現在に至っている。

なお、龍宮社と店舗棟の間に日の出橋（木造）があったが、昭和28年（1953）に流失し、その後埋め立てられ参道となり、現在に至っている。

・道路附帯工作物

ガードパイプ〈28〉は裏参道入口から遥拝所に至る参道海側にあり、全部で４タイプ見られる。

スロープ〈29〉は龍宮社脇の参道海側にあり、郷中施の行事等で浜に下りるために使用される。

階段〈30〉は裏参道鳥居脇にあり、やはり浜に下りるためのものである。

街路灯〈31〉は裏参道鳥居付近から表参道常夜灯付近に至るまで計12ヶ所ある。

・安全確保工作物

ロックネット〈32〉は禊橋から本殿にかけてと天の岩屋付近の参道山側にあり、落石を防止している。

ロックフェンス〈33〉は手水舎付近の岩壁に設置されており、より大規模に落石を防止している。

海岸護岸〈34〉は裏参道入口から表参道入口に至るまで築造されており、これまで度々台風に襲われたが、改修され現在に至っている。

石柵〈35〉は禊橋北側の袂の山側にある。

擁壁〈36〉は裏参道入口から龍宮社にかけてとトイレ付近の参道山側にある。

石積み〈37〉は店舗棟南側、立石（夫婦岩）前、本殿前、表参道入口付近の山側にある。

冬季波除板〈38〉は冬場の海が荒れる期間、富士見橋から拝殿前にかけて仮設される。

・その他

ベンチ〈39〉は龍宮社付近と店舗棟前広場一帯にある。

掲示板〈40〉は、ポスター掲示用のものが表参道入口と龍宮社脇にあり、記念写真宣伝用のものが本殿前にある。

注意板〈41〉は、表参道入口に神域に関するものが、店舗棟前広場に「行場」に関するものがある。

電柱〈42〉は、表参道入口前に１本、龍宮社と店舗棟の間に２本ある。

国旗掲揚柱〈43〉は、二の鳥居脇にある。

世界人類平和祈願柱〈44〉は、山口誓子の句碑の脇にある。

掲示用石柱〈45〉は、表参道一の鳥居脇にある。

方位石〈46〉は、店舗棟前広場にある。

消火ホース格納箱〈47〉は、二見興玉神社授与所脇にある。

消火器格納箱〈48〉は、消火ホース格納箱の隣にある。

水道栓〈49〉は、手水舎脇にある。

郵便ポスト〈50〉は、表参道入口にある。

生垣〈51〉は、表参道入口の二見浦公園との境にある。

○記念物

オオシャコガイ〈52〉（沖縄産）が４つ、富士見橋の南側袂に屋外展示されている。

ii　二見興玉神社参道

・工作物　【位置図Ｐ 62　二見浦地区２】

市道茶屋１号線は表参道一の鳥居前から旅館街に向かって石畳舗装〈15〉となる。平成 15 年度（2003）以降、街なみ環境整備事業により道路の美装化が行われた。

カラー電柱〈16〉は二見浦地区内の参道に７本ある。街なみ環境整備事業により、焦茶色に整備された。

街路灯〈17〉は参道に独立して３基あるほか、電柱にも３基設置されている。街路灯もカラー電柱に合わせ、焦茶色である。

カーブミラー〈18〉は二見浦公園駐車場入口脇にある。カラー電柱と同じ焦茶色である。

近畿自然歩道道標〈19〉は、そのカーブミラーの両脇にある。

・行事　【位置図Ｐ 62・63　二見浦地区２・３】

二見七夕・星まつり〈20〉は、７月中旬から８月末にかけて、参道一帯で開催される。キャンドルナイト、ブラスバンド演奏、花魁道中など、多彩な催しがある。

iii　二見浦公園　【位置図Ｐ 62・63　二見浦地区２・３】

・工作物

ベンチ〈21〉は公園一帯に多数設置されており、概ね石造であるが、一部木造のものもある。

車止め〈22〉は生き物をデザインしたものが多いが、一部金属柱のものもある。

看板〈23〉は表参道入口付近の築山に二見浦観光協会、賓日館付近に伊勢志摩国立公園と近畿自然歩道、日章館付近にまちを美しくする条例制定の町、朝日館別館付近に伊勢志摩国立公園と名勝を記したものがそれぞれある。

案内板〈24〉は表参道入口付近にあり、表が「二見浦観光案内図」、裏が「二

見浦の観光年中行事」となっている。

注意板〈25〉は駐車場を中心に二見浦公園の利用に関するものが５ヶ所、旧二見館付近に犬のフンの持ち帰りに関するもの、いろは館付近にペットのフンの持ち帰りに関するもの、朝日館駐車場付近に鉛製散弾使用禁止に関するものがある。

外灯〈26〉は公園一帯に設置されており、海側と旅館側でデザインが異なる。

電力計〈27〉は駐車場入口付近に設置されている。

電柱〈28〉は朝日館別館脇にあり、こちらも焦茶色である。

配電支柱〈29〉は、まるはま前、駐車場入口付近、賓日館前、朝日館別館脇、朝日館駐車場付近にある。

防火水槽標識〈30〉は、ホテルリゾートイン二見前にある。

消火栓標識〈31〉は、まるはま前にある。

消火ホース格納箱〈32〉は、まるはま前、二見興玉神社参集殿付近、旧二見館付近、ホテルリゾートイン二見駐車場前、朝日館別館脇にある。

消火器格納箱〈33〉は、まるはま前、賓日館前、大田館前、ホテルリゾートイン二見駐車場前、松嶋館前、朝日館別館脇にある。

井戸〈34〉は賓日館前、まつしん脇にある。

宿泊客用のシャワー〈35〉設備が麻野館、松阪屋吸霞園前にある。

石積み〈36〉は二見浦公園と参道が面する箇所に境として連なっている。

柵〈37〉は二見浦清記念碑左右の緑地帯のみ設置されている。

ゲート柱〈38〉は越波を食い止めるため、二見浦公園の出入口に設置されている。

緑地帯〈39〉は旅館街の前面一帯に施されている。

山口誓子の句碑の横は石畳〈40〉敷きとなっている。

iv　海浜　【位置図Ｐ 61・64　二見浦地区１・４】

・工作物

海岸護岸〈３〉は二見浦地区内では二見浦海水浴場付近から御塩殿神社前まで連なる。海水浴場西側では前にＴ字型の養浜突堤が組み合わされている。

排水樋管〈41〉は伊勢市二見グラウンド前にあり、直線状の突堤に挟まれて排水するかたちとなっている。

スイングゲート〈42〉は高潮防止のため、二見浦海水浴場から御塩殿神社前にかけて海岸護岸の出入口に設置されている。

外灯〈43〉は伊勢市二見グラウンド東脇、御塩殿神社西脇の海岸護岸上にある。

・行事

地引網〈44〉が４～６月、９月中旬～ 11 月中旬にかけて二見浦海水浴場で体験できる。二見町旅館組合の主催で、修学旅行生、一般宿泊客を対象としている。

v　御塩殿神社　【位置図Ｐ 70　御塩殿地区】

・工作物

ベンチ〈７〉は打越浜に面するマツ林内の通路沿いにある。

柵〈８〉は御塩殿神社の敷地を取り囲んで設置されている。

vi　音無山公園　【位置図Ｐ 73　音無山地区】

○建築物

トイレ〈９〉は平成 16 年（2004）、名勝指定地内では音無山吊橋の手前に整備された。

休憩所〈10〉も平成 16 年（2004）、名勝指定地内では音無山吊橋の手前、日の出の見える展望台、標高 119.8 ｍの最高所付近に整備された。

○工作物

・道路構造物

吊橋〈11〉は平成４年（1992）、日の出の見える展望台への道筋に整備された。

木橋〈12〉は音無山駐車場からの遊歩道入口の水路に架かっている。

・道路附帯工作物

ガードレール〈13〉は遊歩道登り口から車止めまでの間に設置されている。

転落防止柵〈14〉は遊歩道沿いに木製、擬木、木杭にロープを張ったものが設置されている。

街路灯〈15〉は平成５年（1993）、遊歩道登り口から日の出の見える展望台への道筋に整備された。

・その他

ベンチ〈16〉は音無山吊橋から日の出の見える展望台への道筋に擬木のものが、山腹の展望台とさくら園に木製のものがある。

水飲み〈17〉は音無山吊橋手前の休憩所に併設されている。

車止め〈18〉は遊歩道登り口を少し登ったところに金属製で小鳥を配ったものがある。

指導標〈19〉は遊歩道の分岐点に行き先を示すものがあるほか、日の出の見える展望台への道筋には距離を示すもの、遊歩道登り口には環境省と三重県が設置したものがある。

注意柱〈20〉は日の出の見える展望台への道筋に、距離を示す指導標と同型で火の用心を記したものがある。

看板〈21〉は遊歩道登り口付近に日の出遥拝所の入口と距離を記したもの、山腹の展望台に第１回二見浦さくらまつりの記念植樹を示したものがある。

案内板〈22〉は日の出の見える展望台に「音無山からの展望」、トイレ付近、音無山駐車場からの遊歩道入口、高松稲荷登り口に「音無山生活環境保全林」、山腹の展望台と遊歩道の十字路に「音無山園地案内図」（平成 19 年度（2007）設置）、遊歩道登り口付近に旅館街と二見浦海水浴場の方向と距離を示したものがある。